

第2回アスク日本語教育セミナーレポート

人と人との関係づくりのためのクラスアクティビティ

ー異文化コミュニケーションの視点からー

日時：2008年7月5日（土） 14:00～16:00

会場：株式会社アスク1階

講師：宮崎妙子先生（『人と人をつなぐ 日本語クラスアクティビティ 50』著者）

武蔵野市国際交流協会 日本語学習支援コーディネーター

千駄ヶ谷日本語教育研究所 非常勤講師（「異文化コミュニケーション」担当）

参加費：無料

来場者：12名（事前申し込み13名）

来場者内訳：国内機関日本語講師…9名、

海外機関日本語講師…2名（ドイツ・アメリカ）、

中国語講師…1名

【当日のプログラム】

14:00- 開会あいさつ

14:10- ワークショップ開始

1. はじめに

●アクティビティ① 部屋の四隅

●アクティビティ② 私の4つの顔

2. 教室の中には異文化がいっぱい？

●「文化」ってなんだろう？ 私の文化・あなたの文化

●「アイデンティティ」ってなんだろう？

3. 日本語「教育」とは？

4. 日本語教師の役割とは？

5. おわりに

●アクティビティ③ 2頭のロバ

15:30- 質疑応答

交流会

16:30 終了

1. はじめに

1-1. アクティビティ① (部屋の四隅)

* 体験してみよう：参加型学習の手法「部屋の四隅」



○ 「部屋の四隅」

ある質問に対して、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」「少しそう思う」「全然そう思わない」などの4択の答えによって、学習者が部屋の四隅に移動するアクティビティ。
(ウルトラクイズのイメージ?!)



「日本語が好きですか?」「日本語教師に一番必要なのは技術?」「日本語教師になってよかった?」などの宮崎先生の質問を聞いて、参加者の先生方が部屋の隅から隅へと、どんどん移動していきます。

初めのうちのは「まあまあ」という答えが多かったのですが、「日本語教師になってよかった」という質問のときは、「とてもそう思う」が圧倒的に多い結果となりました。やっぱりみなさん日本語教師という仕事が好きなのですね。

また、その選択肢を選んだ理由を聞くと、同じ答えの人同士でも実は全然理由が違ったり、逆に、違う選択肢を選んだ人同士の理由が似ていたり。

このような個人による考え方の違いも、宮崎先生の言う「異文化体験」なのだそうです。

ワークショップ開始早々、体を動かして楽しそうな参加者たち。

その後、3グループに分かれて、このアクティビティについての振り返りを行いました。

1-2. アクティビティ② (私の4つの顔)

* 体験してみよう：自己紹介「私の4つの顔」



○ 「私の4つの顔」(『人と人をつなぐ 日本語クラスアクティビティ 50』より)

B4用紙を4分割し、それぞれのマスに「①名前、②出身、③今どうしてここにいるのか?、④グループで決めた質問」の4つの答えを1分で書く。

書き終わったら、その紙を見せながらグループ内で自己紹介をする。



④のグループで自由に決める質問は、「好きなもの」「趣味」「血液型」という項目が挙がっていました。

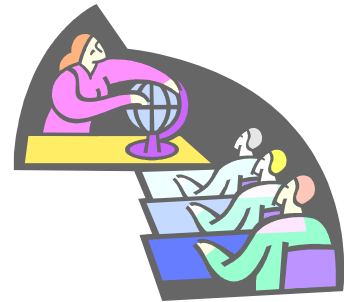
さすがにみなさん日本語教師だけあって、当然、書かれていることを読むだけということにはならず、その答えを書いた理由や面白エピソードなど交えながら、大変盛り上がる自己紹介合戦が繰り広げられました。

振り返りのディスカッションでは、「紙を見せながら自己紹介をすることで、スムーズに自己紹介できる」、「用紙の書き方や発表の仕方で個性を出せる」、「4つ目の質問に適度な自由度があるのがよい」というような、先生ならではのコメントが出ました。

2. 教室の中には異文化がいっぱい？

(1) 日本語教室は「異文化」「多文化」との出会いの場である

学習者—学習者（学生・児童・生徒・地域在住の外国籍市民）
学習者—教師
教師—教師
学習者—地域社会の人々
教師—地域社会の人々



(2) 自己と文化

- ♪ ある社会や文化の一員として生まれる、あるいは一員となるということは自己の形成に大きく関与してくる。要するに、自己と文化は切り離して考えることができない。(池田 2000 : 12)

文化 : 自己の、ある文化集団の帰属意識、同一個人の中に複数存在する

(3) アイデンティティ

- ♪ さまざまなグループへの帰属意識の集合体 (池田 2000 : 18)

(4) 文化

- ♪ 人間が自然との関わり、また、社会的な関わりの中で作り出してきたもの人間が未来に向けて絶えず伝承し、選択し、創造し続けているもの
(山西 2004 : 111)



○2つのアクティビティを通じて、同じ日本人で、同じ日本語教師で、同じような興味を持って同じところに集まった人間同士でも、様々な考え方やもののとらえ方をしていることがわかりました。

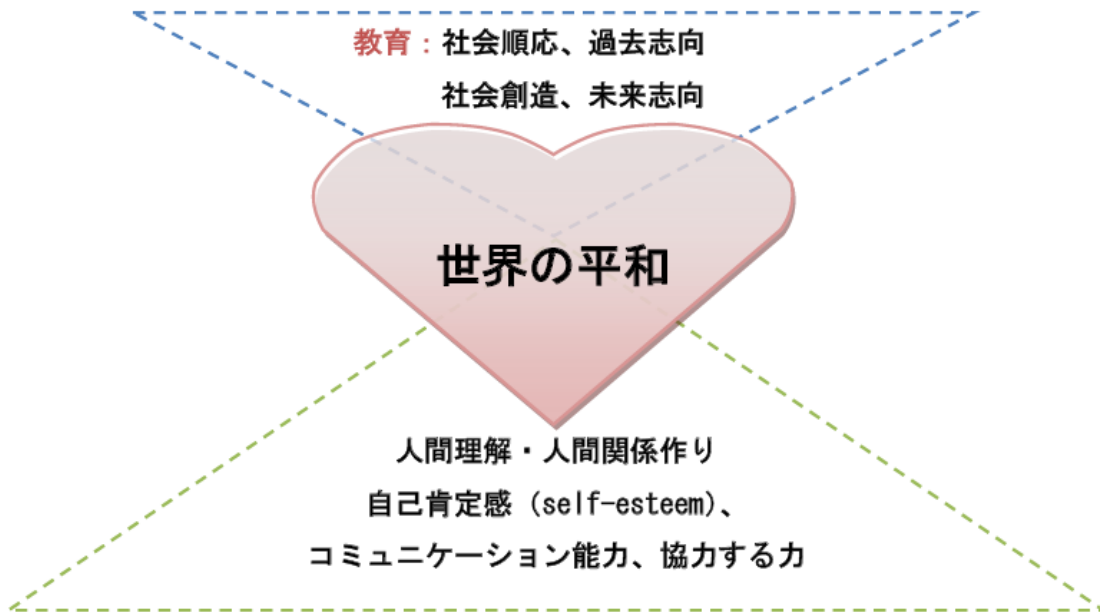
私たちは時として、「〇〇人は…」「男性は…」「女性は…」というように、同じ集合体の人たちを一括りにして考えがちですが、同じ日本人でも全く考え方が違う人がいるように、一人一人が「わたしの文化」を持っているということを忘れてはいけませんね。

事前質問に、「同一国籍のクラスだとアクティビティが盛り上がらない」という質問がありましたが、このことがその質問に対する答えになったと思います。

もう一つ忘れてはいけないことは、一人ひとり異なる「わたしの文化」をグループで共有するためには、各自のアイデンティティが保障され、各自が「わたしの文化」に肯定的な考えを持っている必要があるということです。そのためには、その場限りではなく、日頃からのクラス内の雰囲気作りが大切だということです。

3. 日本語「教育」とは？

(山西 2004 : 109)



4. 日本語教師の役割とは？

- ♪ 専門の研究を究めるために、仕事のために、日常生活のためにといった学習者の明示的なニーズに応えることだけではない言語学習の根源を考慮に入れるのが教師の役割ではないか。

モンフェラン駐日フランス大使

—2004年11月カザルスホールでの講演会より—

多様な学習者、多様な人々をつなぐ

- ・ 多様な人々と対話しながら学びの場をつくっていく
- ・ 多様な人々がお互いに対等な関係で、充実したコミュニケーションをおこなえるようサポートする
- ・ 教師はファシリテーター



○ アクティビティを通して各自が自分の持っている「私の文化」を発信したり、「あなたの文化」に触れたりすることで学びが起きるように、日本語教師の役目は何か知識を押し付けるのではなく、そのような学びの起きる場をつくったり、学習者自身が持っているものを引き出すことだそうです。

参加者の先生から、最近ビジネスの場で使われている「ブリッジ・パーソン」という用語が出ましたが、「ある人とある人とをつなぐ役目の人」という意味では、日本語教師にも当てはまる言葉かもしれませんね。

5. おわりに

アクティビティ③「2頭のロバ」

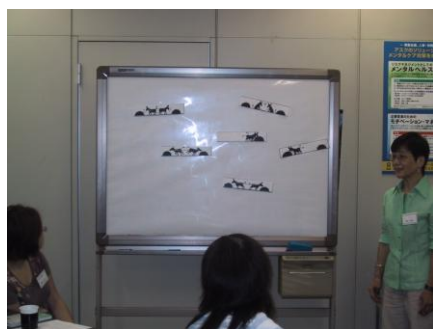
* 体験してみよう：参加型学習の手法「2頭のロバ」



○ 「2頭のロバ」(フォト・ランゲージ)

2頭のロバの絵が描いてある6枚の絵を自由に並べて、それに合ったストーリーを作る。

初めはロバそのものの話、次はそれを何かロバ以外のものに例えて話す。

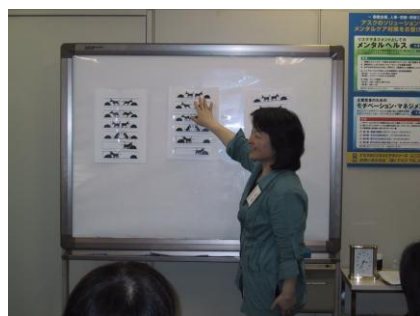


みなさんととても真剣に、何度も絵を見比べては並べ替えたり、並べ直したり、という作業をしていました。



初めの「ロバそのもの」のストーリー作りはあまり難しくなかったようですが、「ロバではない何か」に見立ててストーリーを作るという作業は少し苦勞されていたようです。みなさん「難しい」「難しい」と言いながらも、最終的には、環境問題や、おかしい人間関係、実在する国同士の関係に見立てたりと、宮崎先生も唸るようなすばらしいストーリーがどんどん発表されました。

もともとはユニセフが子供向けに開発した教材ということでしたが、それを抽象的なものとして扱うことで、大人でも使えるアクティビティということがわかりました。



抽象的な活動は苦手な学習者もいるのでは、という質問が出ましたが、抽象的だからこそ、「比喩」という形を借りて、いくらでも学習者が自分自身の問題に結び付けて話せるという点が、学習者自身が言いたいことを引き出すのに有効な手段だということでした。

●質疑応答

★どうしてもアクティビティが盛り上がらないクラスはどうすればいい？

Q : 特に、欧米系の学生と比べて中国系の学生はアクティビティをあまり好まないように見えます。アクティビティ自体が好きではない学生に対してはどうすればいいでしょうか。

宮崎先生 : 基本的に人間は、自分の意見を表現したいと思っているはずなので、〇〇人だから盛り上がらない、ということはないと思います。

普段から、クラス内の学生たちが自分の意見を何でも言えるような場（雰囲気）を作っておく必要があります。

また、教師自身が、自分が面白いことをやっているという自信を持っていることが大切ではないでしょうか。



○。他にも、参加者の先生から、現実場面でどう役立つかということ事前に伝えるなど、そのアクティビティを行なう意味がわかるとモチベーションが上がるのでは、という意見や、文法を教えているときなども、常にアクティビティに結び付ける思考をもって、常にクラスの雰囲気作りに気をつける、というような意見も出ました。

★アクティビティをした後、振り返りはするべき？

Q : アクティビティをやりっぱなしでは意味がないように思うが、いちいち振り返りをしていると、雰囲気が冷めてしまったり、時間がかかります。アクティビティ後の振り返りは常に必要でしょうか。

宮崎先生 : 振り返りはするに越したことはないのですが、アクティビティは、参加者が「やらされている感」を持って逆効果になるでしょう。クラスの雰囲気を見ながら、参加も自由、不参加も自由というぐらいの縛りでいいのではないのでしょうか。

参考文献

池田理知子他（2000）『異文化コミュニケーション入門』有斐閣アルマ

田尻英三・山西優二他（2004）『外国人の定住と日本語教育』ひつじ書房

徳井厚子（2006）『日本語教師の「衣」再考—多文化共生への課題—』くろしお出版

八代京子他（1998）『異文化トレーニング』三修社

山西優二他（2002）『わーい！外国人が教室にやってきた！』

武蔵野市国際交流協会